

看護師が自己のわだかまりに気づき立場の変換ができるまでのプロセス —緊急帝王切開を受けた患者と同体験を持つ看護師の看護実践から—

佐々木佳代（応用看護学）

【キーワード】 わだかまり、緊急帝王切開、看護師の認識、自己客観視、立場の変換

【本研究の目的】

緊急帝王切開患者との関わりにおいて、自己のわだかまりに気づき、立場の変換ができるまでのプロセスにおける看護師の認識の特徴と、看護師の認識の変化の過程を明らかにする。

【用語の定義】

わだかまり：看護師の心の中でつかえている、緊急帝王切開に対する重苦しい気持ち。

【研究対象】

緊急帝王切開を受ける（受けた）患者への看護実践における看護者としての自己の認識

【研究方法】

1. 大学院の授業に提出した緊急帝王切開を受けた（受ける）患者に対する看護実践のプロセスレコードと、看護師の認識の変化に影響したと思われる思考や出来事が表現されている当時のレポートを基礎資料とする。
2. 1のプロセスレコードの中より研究目的に合った7事例を選び（事例A～G）、「患者の状況」「看護師の認識」「看護師の言動・状況」に分けて整理し、とりあげた事例がどのような看護過程と言えるのかを捉え「場面の性質」とする。関わりの特徴をおさえて「タイトル」をつける。また資料より、その当時看護師の感じ考えたことを箇条書きで付け加える。（素材フォーマット）
3. 看護師の認識に着目し、「認識の動き」を捉え、「患者と看護師の関係」と「＜緊急帝王切開に対するわだかまり＞が認識に及ぼす影響」という視点より「看護実践における認識の特徴」を抽出する。

資料よりその当時の認識の特徴を抽出する。

（分析フォーマット）

4. 3全体を概観し、看護師の認識の特徴と変化のプロセスを明らかにする。

【結果】

事例全体における看護師の認識の特徴と変化のプロセスは以下のとおりである。

1. 看護師にわだかまりがあるとき、看護実践における認識の特徴は「看護師の立場で一方的」「看護師と患者の立場を行き来し、看護師から関わりを中断」「肯定的な反応に共感できず葛藤」であり、看護師の思いを先行させる関わりであった。
2. わだかまりに気がつき、その原因を見つめ、受容できるようになると、患者の事実を捉え、三重の関心をはたらかせながら、患者とともに看護の目標へ向かうことができる。さらには立場の変換がスムーズになり、患者に共感し、看護することが看護師自身の喜びや楽しみとなる。この過程は前進と後退を繰り返しながら変化する。

【結論】

以上の結果に加え、看護師が自己のわだかまりに気づき、立場の変換ができるまでの過程においては以下の2点が大きく関与していることが明らかになった。

1. 看護師が自己客観視することは、自己の認識がどのように作られているかを知り、どう看護に反映しているかを自覚することである。そうすることで対象と自己の認識を混同することなく、目の前にいる患者にとって本当に必要な看護を行うことにつながった。
2. 看護師が理論を学ぶ過程では、わだかまりが看護に及ぼしている影響を看護過程の中で捉え、意味づけでき、「看護とは」に照らしながら修正することができるようになる。理論が日常生活レベルで現実とつながると認識は大きく変化し、看護実践も変化する。